

## 講演Ⅱ

# これからの子ども学を考える

榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授・学長特別顧問）

子ども学会も15回を迎え、学会を創立された小林登先生のスローガンである「子どもは未来である」「チャイルドケアリングデザイン」を広く社会に実装してゆく時期にさしかかったと思います。

これまでの子ども学会の道のりを振り返りながら、これからの子ども学会の目指すべき方向について考えてみました。

日本の子どもの身体的健康は、その指標の一つである乳児死亡率にしめされるように世界でも有数の良好な健康状態が達成されています。ではまだ解決されていない子どもの課題はなんでしょうか？

その一つは、子ども自身の自己肯定感（自尊感情）や幸福感の課題です。大人から見た客観的な指標ではなく、子ども自身の自分自身への満足度を調べると、日本の子どもは世界の中でも決して満足度が高くないことが分かります。なぜ子どもは満足できないのか、その答えは子ども自身に聞くしかありません。以前から指摘されてきましたが、これまでの子ども学会には、子ども自身が参画し、自由に意見をいえるような場所がありません

でした。これからの子ども学会の第一の課題は、さまざまな工夫で子ども自身が子ども学会に参加し、自由に意見を述べるような場を作ることではないかと思います。チャイルドケアリングデザインを社会に実装してゆく過程で、子ども自身の発想発案を取り入れてゆく仕組みをつくりあげることです。

もう一つの課題は、未来の世界の市民である子どもたちに、未来においても十分に活躍できるコンピテンシーを身につけるための方策を明らかにすることです。そのキーワードは、innovative mindではないかと思います。大きな社会変化や困難に対して柔軟に対応するだけでなく、新たな発想に基づくイノベーションを行ってゆく能力をつけてもらうことです。本学会の仁木先生の研究では、イノベーションには社会情動スキルが関連していることが示されています。またイノベーションに向かう動機には、子ども時代の遊びが重要であるという知見も明らかになっています。子ども学会には、こうした学際的な研究を促進する場を広く提供してゆくことが求められていると思います。



### ◎プロフィール

日本子ども学会理事長、お茶の水女子大学名誉教授・学長特別顧問。1951年、東京生まれ。医学博士。東京大学附属病院小児科講師、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授、理事・副学長を経て現職。日本小児科学会、日本小児神経学会（元理事）、日本赤ちゃん学会（理事）、日本子ども学会（理事長）、日本小児保健協会、アジア・大洋州小児神経学会（元会長）、国際小児神経学会会員、元NHK中央番組審議会（副委員長）、私立保育園連合（理事）、放送倫理・番組向上機構（BPO）青少年委員会（委員長）、NPOブックスタート（理事）、ヤマハ音楽振興会（評議員）、チャイルドレサーチネット（所長）、ベネッセ教育総合研究所（常任顧問）。著書に『ヒトの発達とはなにか』筑摩書房、『発達障害と子どもの生きる力』金剛出版、『よくわかる発達障害の子どもたち』ナツメ社、『脳科学の壁』講談社、『脳科学と発達障害』中央法規出版ほか多数。

